

「うっかりしている時」とチャンスの訪れ

石塚美穂子

いずみナーサリーに勤務して二年目、私はまだまだ駆け出しの保育士ですが、新しいことに慣れることで精いっぱいだった一年目に比べ、少しだけゆとりをもって保育ができるようになってきました。以前勤務していた幼稚園での数年間と、新しくナーサリーに勤めてからの保育を振り返ってみると、カリキュラムを立て、意図をもって保育をしていく中で、なかなかそううまくはいかず、予想もしない展開になることがあり、保育はおもしろいと感ずることがありました。逆にとんでもない失敗をしてしまっ

……と落ち込むこともたびたびありました。

そんな私がここまで保育を続けてこられたのは、子どもたちや周囲の大人たちなど、たくさんの方の支えがあったからだと思います。そのことが私の心の支えとなり、日々の活力となっているのです。

「先生、大変!」

以前勤めていた幼稚園で、年長組の担任をしていました。男児Rが虫探しに夢中になっていました。私は、Rがどんな表情で戻ってくるか、楽

しみな気持ちで見守っていました。

しばらく経ち、「せんせーい！ カマキリ見つけた！ バッタもいたよ。自分で捕まえたの、すごいでしょ！」と、それは満足した表情で見せにきてくれました。虫かごを大事に持ち、「飼いたいな」と言うR。

「一所懸命探したから大事に飼いたいのよね。お帰りの時に、みんなに相談してみましよう」と話すと、にっこり笑い、うれしそうに庭へ駆けていきました。

その後、「お帰りの時間よ」と園庭で遊んでいた子どもたちを呼びに行った時、Rが焦った様子で虫かごを持ってきました。

「先生、大変！ バッタが食べられちゃってる……」残酷なことに、ムシヤムシヤと食べる音も聞こえました。同じ虫かごに、この二匹がいたら、食べられてしまうことは予想がつかますが、私は当時、Rにどうかかわろうか、どんな言葉をかけようかとい

うことに一所懸命で、先のことまで考えが及ばず、このような事態を招いてしまいました。

Rが虫を見せにきてくれた時、私はほかの子どもとかかわっていて、そこから離れ、R一人に気持ちを向けることは難しいと思っていました。それでも喜ぶ気持ちには応えたいと、その場で言葉をかけ、私なりに精いっぱい心の心を伝えたりしました。しかし、忙しさにかまけて新しい虫かごを用意するのを忘れ、バッタの命を奪ってしまったので、後悔の気持ちが残りました。

クラスの子どもたちが、うわさを聞きつけて集まってきました。代わる代わる虫かごの中をのぞいています。

「あつ、カマキリが、バッタを食べてるよ」

「バッタが、かわいそう」

「カマキリは悪い奴だ」

など、感じたことを思い思いに口にする子どもたちですが、

「でもさ、カマキリもおなか空いてたんじゃない？
カマキリだってごはんがなかったら、おなかペコペ
コでかわいそうだよ」とR。

「あつ、そうか！」と周りの子どもたち。

カマキリとバッタ、両者の気持ちを考えるように
なっていました。そして子どもたちで相談し、カマ
キリは園庭に逃がすことに決まりました。

お帰りで集まった時、カマキリがバッタを食べた
事実と重ねて、私たちは、ごはんを食べる時、魚や
鶏、豚、牛など生きている命をいただいているとい
うことを、ていねいに話しました。私は、このよう
な話をできる機会がもてるとは思っていませんで
したし、もちろん、この日の計画にもありませんで
した。でも、いまこの時がチャンスだと確信し、話
をしたのです。命のことを考えていくきっかけに
なったのではないかと感じています。

私のうっかりから、子ども同士の会話やふれあい
が生まれ、そこから保育が展開していきました。何

だか、子どもたちに助けられたように思います。そ
して、思いもよらないところでチャンスは訪れてく
るものだと驚くと同時に、新しい発見をした瞬間で
もありません。

友達ってうれしいな

いずみナーサリーでは、〇・一・二歳児の子ども
たちが生活をしています。緩やかにクラスが分かれ
ていて、私は現在〇歳児クラスの担任をしています。

途中入所してきたS（一歳五か月・女兒）は、い
までは、ナーサリーが安心できる場となり、担任と
の信頼関係もでき、自分らしさを出し始めています。

最近、一歳児クラスのK（一歳六か月・女兒）に
関心をもつようになったので、今後は、出合いの
チャンスができるだけつくっていくこうと思いい、Kの
いる保育室へ連れていき、ふれあうきっかけを待ち
かまえていました。^注

おままごとで遊びを共有できるかな、一緒に絵本

を見るかな、といろいろ期待をし、誘いかけますが、Kは、近づいて頭をなでてくれることはあっても、それ以上のことはありませんでした。また、Sもそれほど追うことがありませんでした。出会える機会を増やそうと意図をもっていました。この時は、互いに求めていなかったのではないかと思えます。

いずみナーサリーでは、その日のクラスの計画を伝え合うようにしています。一度決めても、その時の子どもの状況で変更するなど、柔軟に対応しながら保育をしています。

クラスごとの計画で大学構内へ散歩に行くことがありますが、学内にも幾つか遊ぶ場所があるので、それぞれのクラスが行く場所を事前に確認し合うことにしています。目的によっては、散歩に行く場所を同じにしたり、あえて違う場所に変更したり、とさまざまです。

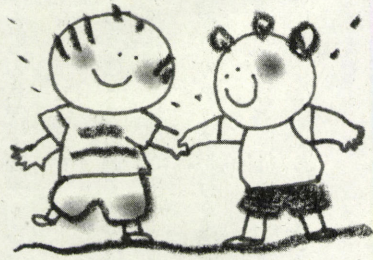
天気の良い、ある日のことです。外で心地よく過

ごしたいという思いだけで、〇歳児クラスは大学構内の広場に散歩に行くことにしました。ほかのクラスの子どもたちが同じ場所に行くかどうかは考えずに、うっかり決めてしまったというような状況で出発しました。

到着すると、〇歳児クラスと一歳児クラスが同じ広場で出会いました。その時、Kが近づいてきて、Sの手を握ろうとしていたのです。「いまこそ、ふれあいたいと思っている時だ！」と感じました。

「仲良くしようって言っているみたいよ、うれしいね」と、私はSに言葉をかけました。Kの担任も、「Sちゃん、一緒に遊ぼう」と、Kの思いを言葉にしました。何だかSはうれしそうです。二人の手がしっかりつながれた時、Kは、心もちお姉さんらしい表情をし、Sは、はにかんだ笑顔を見せていました。

そして、SはKに手を引かれ、歩き始めました。二人の間には確実に幸せな時間が流れていて、心がつながったように感じられました。それぞれのク



ら、子ども同士が求めている瞬間があったのに、自分の思いが先走っていたために、見えていなかったのではないかと思いました。

クラス別々に出発し、散歩に行く中でも、到着してほかのクラスとの出会いがあります。○歳児の子どもたちも「あつ、会えた!」「みんながいる!」と言っているかのようにうれしそうな表情をしたり、指さしをしたりします。一、二歳児クラスの子どもたちも笑顔で手を振り、こちらに来てくれるの

ラス担任もその場面を見てほほ笑んでしまう、幸せな“とき”だったように思います。

私が意識して、SとKの出会いの場を用意していた時は、もしかした

です。そこから、ふれあいにつながっていくことがたくさんあることに気づきました。

保育室でも、異年齢のクラスと、いつでも緩やかに行き来ができます。このような重なり合う環境があることで、子どもも大人も、人との出会いを楽しみながら、ゆったりとした気持ちで過ごしていけるのではないのでしょうか。

偶然と必然、この両方が絡み合う中で、保育は行われています。そのどこかで確実に、子どもたちにも、人との出会いや、人と気持ちが通い合えるような、いろいろなチャンスが訪れているように思います。

気づかせてもらうことのありがたさ

保育は、一方的ではなく、互いにふれあうことで成り立っています。保育者が子どもに働きかけ、子どもが保育者に応じ、子ども同士も気持ちを重ね合い、みんなが影響し合い、育っていきます。幼稚園

の事例は、まさしく、子どもたちのふれあいがあった、それに支えられてこそ、成り立った保育だと思っています。

ナーサリーの事例では、出会いのチャンスを用意したことは計画でした。しかし、保育をしていくと、実際の子どもの姿との間にズレが生じ、計画どおりには進みません。このことに気づき、計画に縛られずに、いまの子どもの姿を大事に保育をしていることが、子どもと保育者の安定した生活につながっていくのではないのでしょうか。

いろいろと考え、計画を立てても、保育はそのとおりにはいきませんが、カリキュラムを立て、見通しをもつことは必要です。計画どおりにいかない時に、いま、何が必要なかを考え、全力で対応していくことが求められると思います。この考える時こそ、私たちを成長させてくれる、絶好の学びのチャンスではないかと思うのです。

うっかりが、ただの不注意となってしまうことの

ないように、あの時、私は子どもの思いに気づいていただろうか、保育者としてのかかわりはどうだったのだろうか、振り返ることを大切にしたいと思っています。

倉橋先生の「うっかりしている時」の教えには、私はまだまだ到達していませんが、思いがけないチャンスの訪れがあり、そこから保育が発展し、新しい発見ができたことは、私にとって、大きな一歩だったと感じています。

子どもと向き合い、子どもに寄り添う保育を大切にし、その日、その場に訪れたチャンスをしっかりと受け止めることのできる保育者でありたいと思います。

(お茶の水女子大学いずみナーサリー)

注 SとKは月齢が近いのですが、入園した時期が異なること、保育室の数、広さの関係でクラスが別になりました。